

『長距離走者の孤独』における時制の切り替わり

白 谷 敦 彦

0 . 序

本論文はアラン・シリトーの『長距離走者の孤独』の第3章における現在時制と過去時制の切り替わりを取り扱う。本小説は主人公が自分の人生を振り返って語るという手法が取られているが、現在時制から過去時制へ、過去時制から現在時制に切り替えられながら語られている。特に第3章には顕著な特徴が見られるので、この章を取り上げて、どのように時制の切り替えがなされているかについて考察する。『長距離走者の孤独』の概要は次のようなものである。主人公 Smith はパン屋に忍び込んでお金を盗み、お金を自宅に隠しておいたが、目撃証言から怪しいとにらんだ警官によって目をつけられることになる。数度尋問を受け最終的には隠しておいたお金が発見されたために少年院送致となる。少年院ではクロスカントリーの長距離ランナーの選手にされる。そしてクロスカントリーのレースに出場し、優勝できる力を持っていたが、わざと負ける。以上が概要であるが、この物語は、その主人公の少年院での出来事の回顧が第1章になっており、パン屋に忍び込んでから捕まるまでの回顧が第2章で（時間の流れからいうと、第2章で語られるできごとが第1章で語られることに先行する）、クロスカントリーのレースについての回顧、そしてその後日談が第3章になっている。

1 . 第3章における時制の切り替わり

では、第3章における時制の切り替わりをみていこう。適宜下線を施し、わかりやすいようにする。また、ページと行は筆者が用いたテキストのものである¹。第3章は次のように過去時制で始まる。

The pop-eyed potbellied governor said to a pop-eyed potbellied Member of Parliament who sat next to his pop-eyed potbellied whore of a wife that I was his only hope for getting the Borstal Blue Ribbon Prize Cup for Long-Distance Cross-Country Running

過去時制から次の下線部の箇所¹で現在時制に切り替わる (p.78, l.14)。

I ran to a steady jog-trot rhythm, and soon it was so smooth that I forgot I was running, and I was hardly able to know that my legs were lifting and falling and my arms going in and out, and my lungs didn't seem to be working at all, and my heart stopped that wicked thumping I always get at the beginning of a run. Because you see I never race at all; I just run, and somehow I know that if I forget I'm racing and only jog-trot along until I don't know I'm running I always win the race.

下線部の前はレースに出場し、実際に走っている状況が語られる。そして、下線部でランニングの練習でいつも感じるものを感じたということが語られ、そこからランニングに関する主人公の考え方へと思考が移ってゆく。ランニングに関する主人公の考え方は現在にもあてはまるから、現在時制で語られる。

現在時制から次の下線部の箇所まで過去時制に切り替わる (p.79, l.9)。下線部の前は走っているコースの描写となっている。

better for thinking because it's not too smooth, and I was in my element that afternoon knowing that nobody could beat me at running For when the governor talked to me of being honest when I first came in

主人公はランニングをしながら考えることが好きで、その考え事をするのにコースの地面の状態がよかったと述べている。そして思いはある特定の日の午後の自分の状態、そしてその時に思っていたことへとめぐらされる。さらに、少年院に来た時に最初に院長からかけられたことばへと思考は続く。文の途中ではあるが、「例の日の午後 (that afternoon)」への回顧へと切り替わり、思考が過去のことへと向かったため、それを反映して過去時制へと切り替わっている。

過去時制から次の下線部の次で現在時制に切り替わる (p.81, l.23)。

the only time you stopped really was when you tripped over a tree trunk ... and stayed dead in the darkness forever. So I thought: they aren't going to get me on this racing lark, this running and trying to win

下線部の次から現在時制になるが、導入を表す I thought という表現が用いられている。内容は「院長らは俺をレースに出して優勝させようと思っているが、そうはいくか (そうはさせるか)」ということであるので、院長らの考え方や姿勢を過去時制で先行文脈で述べた上で、それを否定するように行動するぞという強い意志を表明している。強い否定の気持ちを述べるには過去時制では弱いため、その気持ちをあたかも今持っていてそれを述べるかのように現在時制で表現したのであろう。これに続く思考が示された後、段落が改められ、過去時制で始められる (p.82, l.8)。

On we went, out of the wood, passing the man leading without knowing I was going to do so.

過去時制が使われたのは、走っている自分の状況を第三者的な視点から描写することに移行したからであろう。

過去時制から次の下線部の箇所では現在時制に切り替わる（p.83, l.6）。

knowing I had won the race though it wasn't half over ... and I knew I could do both because my legs had carried me well in front ... and would carry me further because they seemed made of electric cable and easily alive to keep on slapping at those ruts and roots, but I'm not going to win ... winning ... means running right into their white-gloved wall-barred hands

下線部の前はレースで勝利を確信したという描写がなされている。しかし、最終的に優勝するつもりはない（わざと負けて院長らをはっきりさせてやろうと考えている）ので、それを否定する現在時制の表現が現れる（I'm not going to win...）。優勝は院長の勝利を意味するから、わざと負けてやろうと考えている。従って、優勝してやるもんかという否定の気持ちが強いのである。勝利を確信したのだからそのまま走って優勝するのかという推測を第三者（読者）はすることになるので、それに対して否定している。先述のように、強い否定の気持ちを述べるには過去時制では弱いので、その気持ちをあたかも今持っているそれを述べるかのように現在時制で表現しているといえよう。このような気持ちが語られた後、段落が改まり（p.83, l.18）Another honest thought that comes is that I could swing left at the next hedge of the field ... という導入がなされ、過去時制で文章が続いてゆく。

過去時制から次の下線部の箇所では現在時制に切り替わる（p.84, l.3）。

But no, I said I wasn't daft didn't I? I won't pull out with only six months left,... .

先行文脈では、ランニングの途中で脱走するという考えが紹介される。第三者（読者）は主人公が脱走するのかと思う。それに対して、「いや、あと6ヶ月で出所なんだからそんな馬鹿なことはいない」という上記の表現がなされ、読者の予想を否定することになる。強い意志をもって「～しない」と考えていることを表現するために現在時制に切り替えられた。これまでに2回現れた、否定形でもって現在時制への切り替えがなされるパターンである。

現在時制から次の箇所では過去時制に切り替わる（p.84, l.14）。

I won't be worth a threpp'ny-bit to anybody here, which will be all the thanks I get for being honest in the only way I know. For when the governor told me to be honest ...

Honest という言葉が出たので、それは院長の発した言葉だったという回想がなされ、院長がその言葉を発するというシーンに移行する。従って、ここから過去時制が使われる。

過去時制から次の下線部の箇所では現在時制に切り替わる (p.84, l.20)

I got the cushiest six months still left to run; but in my own way, well, it's not allowed, and if I find a way of doing it ... I'll get what-for in every mean trick he can set his mind to.

先行文脈では院長の考え方と自分の考え方が示される。そして自分の考え方で事を進めることが紹介される。それに対してのことは下線部である。自分の考え方で事を進めることは不可能という認識があるので、それを否定することになる。やはりここでも先行文脈の否定を行うのに現在時制が用いられている。

次の引用箇所 (p.87, l.10) では、現在 過去、過去 現在、現在 過去と、短い間に時制の切り替えが行われている。

I'm the greatest worrier in the world ... which is funny anyway because my mam don't know the meaning of the word so I don't take after her; though dad had a hard time of worry all his life up to when he filled his bedroom with hot blood and kicked the bucket that morning when nobody was in the house. I'll never forget it, straight I won't, because I was the one that found him and I often wished I hadn't.

文の途中 (第1の下線部) から父の回顧になり、過去表現となる。父の死の場面が少し語られると I'll never forget it (第2の下線部) という否定形が用いられ、現在に思考は戻る。しかし、すぐに父の回顧へと戻るので (第3の下線部)、過去時制になっている。

過去時制から次の下線部の箇所では現在時制に切り替わる (p.88, l.26)

I didn't brood much on it. I wonder why? I suppose that since I started to think on these long-distance runs I'm liable to have anything crop up and pester at my tripes and innards ...

これに先行する箇所では父の回顧がなされている。そして自分のことへと思考が移り、当時自分はあまり考え込まなかったと語られる (I didn't brood much on it) それについて I wonder why

（下線部）で自問している。従って現在形へとシフトする。ここでは I suppose that という思考内容への導入がある。

次の引用箇所（p.89, l.16）では、現在 過去、過去 現在、現在 過去と、短い間に時制の切り替えが行われている。

I'll win, in the crunchslap end. So anyway after a bit I went upstairs one step at a time not thinking anything about how I should find dad and what I'd do when I did. But now I'm making up for it by going over the rotten life mam led him ever since I can remember, knocking-on with different men even when he was alive

レースの状況描写から父の回顧へと戻るので過去時制へとシフトしている（第1の下線部）が、すぐに現在の自分の生き様へと思考は移り（第2の下線部）、現在時制へとシフトしている。そして今度は母親の態度へと思考が移り（第3の下線部）、過去時制になっている。

過去時制から次の下線部の箇所では現在時制に切り替わる（p.90, l.4）。

I had to stand up to stop him even though I knew she deserved it. What a life for all of us. Well, I'm not grumbling

この箇所に先行する部分では、病死した父が生前、母親の浮気に腹を立て母親をなぐろうとし、それを自分が止めに入ったという過去の出来事が語られる。そのことに対して、I'm not grumbling（ぐちを言っているのではない）としている。これも先行文脈で語ったことを現在形で否定し、そのまま現在時制で語り続けるというパターンを踏襲している。この後、レースの状況が現在時制で語られるが、父の回顧になると過去時制となる（p.91, l.17）。ここでは But I'm still thinking of the Out-law death my dad died という導入がなされ、過去時制での父親の描写となる。それが終わると段落が改められ、レースの状況が過去時制で語られる。

過去時制から次の下線部の箇所では現在時制に切り替わる（p.92, l.16）。

I didn't want to give anybody that much of a show, or win the race by accident. I smell the hot dry day now as I run towards the end, passing a mountain-heap of grass

この箇所に先行する文脈ではランニング・レースの状況が語られ、引用箇所の最初にあるように、自分は勝つつもりがないことが語られる。そしてレースは最終段階に近づいてきたことが語られるが（I run towards the end）その直前に下線部で匂いを感じたという表現から現在時制に移行するので、読者も今匂いを実際に感じるような気がして、あたかも目の前でレースが行われているような描写となり効果的である。このまましばらくレースの状況の描写が続き、次の下

線部の箇所では現在時制から過去時制に切り替わる (p.94, l.22)。

the only time I'll hit that clothes-line will be when I'm dead Until then I'm a long-distance runner, crossing country all on my own no matter how bad it feels.

The Essex boys were shouting ... telling me to get a move on

レースが最後に近づいているという描写がなされ、それから自己の内面の描写に移っている。死ぬまでは自分は長距離走者なんだと。段落が改められ、応援者たちの描写が過去時制でなされる(下線部)。内面の思考に頭がいていて気づくと目の前の状況はこうだったということで、その状況がある程度進行して後からその状況に気づいたということであるから、過去時制で語られると、現実を認識したときには事態がある程度進んでいてある程度過去のことになっており、今になってそのことに気づいたということが効果的に表現される。

次の引用箇所 (p.96, l.11) では、過去 現在、現在 過去と、短い間に時制の切り替えが行われている。

It's about time to stop; though don't think I'm not still running, because I am, one way or another. The governor at Borstal proved me right; he didn't respect my honesty at all

段落が改められているが、前段落の最後はレースのラストシーンで、過去時制で語られている。そして第1の下線部の It's about time to stop ということばでこの物語の原稿を執筆している時が表現されており、現在時制で語られている。そしてすぐにレースの後の出来事への描写へと移る(第2の下線部)。従って過去時制となる。この引用箇所の後、レースの後日談がすべて語られると再び、現在の執筆時へと時間が進み、段落が改められ (p.98, l.14) In the meantime I'm going to give this story to a pal of mine という表現でもって現在時制へとシフトする。このままこの執筆中の原稿についてのこと(渡そうとしている友人のこと、院長が読むかどうかといったこと)が語られ、現在時制で物語は終わる。

2. 結論

本論文はアラン・シリトーの『長距離走者の孤独』の第3章における時制の切り替わりについて考察をおこなった。語りにおける時制の切り替えが主人公の意識や思考を反映するために効果的に用いられているといえることができる。

注

1. テキストに用いた版は、昭和37年（1962年）に金星堂から出版された *THE LONELINESS OF THE LONG-DISTANCE RUNNER* である。

参 考 文 献

- 大江三郎. 1982. 『動詞（ ）』 東京：研究社出版.
大江三郎. 1983. 『動詞（ ）』 東京：研究社出版.
大江三郎. 1984. 『英文構造の分析 - コミュニケーションの立場から - 』 東京：弓書房.